

京都大学教育研究振興財団助成事業
成果報告書

平成23年 5月12日

財団法人京都大学教育研究振興財団

会長 辻 井 昭 雄 様

所属部局・研究科 アジア・アフリカ地域研究研究科

職名・学年 一貫制博士課程 4年

氏 名 宗 野 ふもと

事業区分	平成22年度 ・ 長期派遣助成		
研究課題名	現代ウズベキスタンにおける女性の仕事:カシュカダリヨ州絨毯工房の事例から		
受入機関	ウズベキスタン国立科学アカデミー歴史学研究所		
渡航期間	平成22年 4月12日 ~ 平成23年 5月 9日		
成果の概要	タイトルは「成果の概要/報告者名」として、A4版2000字程度・和文で作成し、添付して下さい。「成果の概要」以外に添付する資料 <input checked="" type="checkbox"/> 無 <input type="checkbox"/> 有()		
会計報告	交付を受けた助成金額	2,550,000円	
	使用した助成金額	2,550,000円	
	返納すべき助成金額	0円	
	助成金の使途内訳 (使用旅費の内容)	航空券	200,000円
		移動費	600,000円
		滞在費	1,750,000円

研究テーマ：現代ウズベキスタンにおける女性の仕事：カシュカダリヨ州チロクチ地区の事例から

研究目的：ソ連解体以後、市場経済化が進む現在のウズベキスタンにおいて、どのように絨毯が制作されているのかについて、制作者である女性の日々の仕事と絨毯制作とのバランスに着目し明らかにする。

調査地：ウズベキスタン共和国カシュカダリヨ州チロクチ地区

期間：2010年4月～2011年5月9日

報告者は、ウズベキスタン共和国カシュカダリヨ州チロクチ地区アラブバンディ村のフドイクロフ・シャリフ氏宅に約一年間住み込み、アラブバンディ村を中心にチロクチ地区の村落部の生活と絨毯制作の実態を調査した。

調査地では牧畜が盛んで、羊毛を利用した絨毯制作が現在でも行われている。絨毯織りは暖かくなりだす3月半ばから4月にかけて、多くの家庭で女性たちの手によって行われる。材料となる毛糸は冬の間には紡がれる。羊毛は、自家羊から採ったものや、バザールで購入されたものである。多くの家庭では、部屋に敷くためや、娘、息子の結婚のために絨毯が織られる。チロクチ地区では、板張りの床は裕福な家庭でのみ見られ、多くの家の床は土台の土がむき出しとなっている。そのため、絨毯は部屋の彩りを豊かにするだけでなく、冬の底冷えを和らげるための防寒具としても重要な役割を果たしている。また、絨毯は結婚の際の持参財になる。現在では、結婚に際して嫁側は4枚、婿側は6枚の絨毯を用意しなければならない。嫁側の用意した絨毯は、結婚後しばらくはサンディク（婚礼用の衣装箱）の上に布団や枕といった他の持参財と一緒に飾られ、その後、必要に応じて部屋に敷かれたり、売られたりする。婿側の用意した絨毯は、新婚夫婦の部屋に敷かれることが多い。

結婚の際に準備された絨毯は、現金が必要になった際にバザールで売られることがある。バザールで絨毯を売っている理由を売り手に尋ねたところ、多くの売り手は少しためらいがちに、「子供が病気になって、薬を買うために絨毯を売っている」とか「息子が小学校で使うノートやなんかを買うためだ」という事情を話してくれた。バザールだけでなく、他の場所で絨毯の話をする、「貧しい人が絨毯を売るものだ」という語りが聞かれることがしばしばあった。調査地において主流となっている現金収入源は家畜である。こうした語りの背景には、家畜を多く所有しない人たちが絨毯を売って現金を得るという意識があるようだ。

こうして売られている絨毯の主な買い手は、仲買人である。彼らは、チロクチ地区のバザールで絨毯を買い付け、シャフリサブス、キトープ、ヤッカボグなどの農業が盛んで絨毯制作は現在あまり行われていない地域に行商に行く。絨毯ビジネスをはじめて35年とい

う仲買人から聞いた話によれば、ソ連時代と比べてバザールで売られる絨毯の数は増えているということである。その理由として、仲買人は、独立後のウズベキスタンではソ連時代のように皆に仕事があるわけでもなく、それに反比例するように物価は上がり続けており、現金の重要性が高まっている点を挙げていた。

絨毯の制作者である女性に課された仕事は多い。彼女たちは、仕事を日々こなしながらその合間に絨毯を織っている。村の女性の仕事は、ノン（パン）焼きにはじまり掃除、炊飯、搾乳、洗濯、育児、農作業、家畜の世話など枚挙にいとまがない。様々な仕事をこなさなければいけない状況にあって、制作者たちは、家事の割り振りを家族の中で調整したり、親戚、隣近所に絨毯織りの人手を頼ったりしながら絨毯織りを進めている。絨毯を織りながら、手伝いに来た織り手に向かって「他の仕事があるからなかなか絨毯織りが進まない」とか「織りだしてから一週間たってもまだここまで。なんて恥ずかしい」といった話をしていた。さらに、絨毯織りのシーズンになると、村の人々の会話の中で「●●は●●日で絨毯を織りあげたらしい」という話が時々聞かれるようになった。女性に課された仕事は多いが、その状況の中で仕事を調整し、人手を確保し、できるだけ早く絨毯を完成させるのが彼女たちの目指すところのようである。

今回のフィールドワークによって、現在のウズベキスタンにおける手織りの絨毯は、調査地の人々にとって、生活や儀礼の必需品であるとともに、市場経済化が進む中での村落部における貴重な現金確保源としても位置付けられていることが明らかになった。村の生活における絨毯の必要性と、市場における絨毯の価値があいまって、絨毯制作が営まれているのだ。さらにその背景には、絨毯をきれいに、できるだけ早く完成させることと、村の女性としての名誉の関連があることも忘れてはならない。

今後は、現金確保源でありながらも、絨毯を売ることをあまり肯定的にとらえていない、という売り手の語りや、絨毯を速く織ることの重要性にも着目し、絨毯の威信財、象徴財としての側面について、制作の段階から焦点を当てた調査をしていきたいと考えている。